

スペイン風邪は3人に1人 忍び寄る疫病、抑制に期待

2021年1月4日(月)配信共同通信社

忍び寄る疫病と闘ってきた人類。1917～20年に世界でまん延し、数千万人が死亡したスペイン風邪は、当時の世界人口のほぼ3分の1が感染したとされる。当時とは時代が異なり、[感染予防策](#)の浸透やワクチン開発により[新型コロナウイルス感染拡大](#)は今後抑制が期待されるが、どこまで広がるかは見通せず、依然として危機感は強い。

記録のあるパンデミック(世界的大流行)の中で、最も被害の大きかったとされるのがスペイン風邪だ。第1波より第2波の方が致死率が高く、20～40代の若い人が多く犠牲になったが、第3波で致死率が下がった。

季節性インフルエンザは日本で毎年1千万人前後がかかり、人口比では約8%。米疾病対策センター(CDC)によると、全米でも約8%が感染する。現代の[三大感染症](#)と呼ばれる[結核菌](#)は世界人口の4人に1人が感染しているとみられている。エイズウイルス(HIV)は、80年代の流行開始以降の累計で7570万人が感染した。

日本の新型コロナ[感染者数](#)は22万人を超えたが、全人口比では0.2%ほど。人口が集中する東京23区は高めで、中でも新宿区は100人に1人を超える約1.3%となっている。(共同)